私と生贄。

ケルトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と生贄。

【Nコード】

N3257L

【作者名】

ケルトン

【あらすじ】

普通の平凡な人間である私は気付くと、異世界にいた。なんとなくその世界で過ごすうちに自分がこの世界にとって重要な存在である事に気づく。私は世界に加護を与える女神”フェリナーデ”だった。

気付けばまた異世界、そして私は人間でなくなっていて、私に生贄が差し出されるようになる。

神である私とその生贄の恋愛話。

以前筆者が他の所で描いていたオリジナル小説を書き直したものに
なります。
話の流れが遅いかと思われず。

第一話 始まり

「起きて。」

子供の声が世界に呼び掛ける。
何？”私”を起こすのは。

「ねえ、起きて」

薫りが、する。この薫りは何？
私はこの薫りを知ってる、でも、分からない。

「ねえってば」

ああ、意識が浮上する。

どうしたの、そんなに”目覚め”を促して。
何かあったの？”私”の大切な。

「フェリナーデさま、」

風の運んでくる土と草の匂い。

仄かなる花の香りが私の意識を次第とはつきりとさせて、
瞼をゆっくりと開いた。

私を包むかのような、ビルが聳え立つ現代じゃあまり見られない、
青い空と綿雲が私を見降ろしていた。

薄っすらと開いた目でしばらく、ぼけーっとそれを見つめていたところをやっと、私は疑問を口にする事ができたのだった。

「ここ、どこ？」

不可解な出来事に直面し困惑した頭で素早く上半身を起こして、周りを見渡すがそこには見知った自分の部屋ではなく、煌々と広がる草原なのだった。

こつという場合、誘拐だとか夢遊病で知らないところに来てしまったと考えるべきだが

残念なことにその選択肢はのっけから除外される。

なぜなら、私の家の近所にこんな素晴らしい、見渡す限りコンクリート建造物のない、しかも空気のおいしいときた

大草

原なんでないからである。

「あらー…夢かしらー？」

そう、夢しかない。夢しかないはずなのである。

夢ならば多少突拍子もない場所に自分が存在したり、あははつぶふな妄想も可能なのだ。

だがこれは本当に夢だろうか。

草原がさわさわと揺らす心地よい風や、その風の運んでくる花や草の匂い。

はたまたそこらへんを飛び回る、ウサギのような一匹の生物。

そして、私の身体周辺の、気配。

なんだろう、気配を感じるってのは現代人じゃ普通にありえない事なんだけど判るんだよね。

何かがあるって事が。普通、そんな気配感じてたら幽霊か？って気味悪がるどころだけ。

安心感が私の心を支配してる。

”彼ら”がいるのが当たり前で、私を守ってくれてるんだって判る。

気配は多分、いい者なんだと思う。

邪悪な存在じゃないって気がする。勘なんか当てにするもんじゃないだろうけど、そうだと感じるからきつとそうなのだ。（何なんだ自分。）

それに、この”世界”は喜んでる。

今まで新しい命が紡がれることさえ危険で、容易に命の歯車を回せなかった”世界”

それは”加護”がなかったから。ずっと見放されていて、悪い魔物が巣くっていたから。

でも大丈夫、これからはそんなことさせないよ。

だって”私”が

「私”……？」

そこで疑問が生まれた。

何故だろう、この不可解な感覚。

私はこの世界での役割を知っていて、私は役割を全うするためにココにいる。

たぶん、いやきつと知ってるんだろう。”私”はこの”世界”を。

そう、知ってる。

でも、知らない。分からない。

心の奥底で判っているのだけきつと。

「はあ…夢の中ではなんでもありですか？」

夢だから仕方がない、のかもしれない。

夢と決まったわけじゃないけど。

とりあえず、今すべき事を優先させて私は進まなければいけない。
そう思えるのだ。

「とりあえず、先へ進んでみようかな…」

そう呟いた時、”世界”が私を祝福した気がした。

第二話 蒼穹

歩くにつれ、私を取り巻く気配が濃くなった、ような気がする。

今までは何かヴェールのようなものを纏って私を中心にふわふわと漂っていたのだが

足を進める度に、というか時間が経つにつれその”何か”は段々と気配を濃くして、量感をはっきりと感じ取る事が出来るようになった。

それはもう私の周りに侍るように、次第と増大している気がする。

別に（私にとって）人畜無害なので気にはしていないが、多分”彼ら”は力を持ったのだと思う。

何がどのようにして力を得たか、などは説明できもしないが恐らく”彼ら”は私から力をもらっている。

私の内側から何かが奪われる感覚はあるのに全く気持ち悪いだとか、嫌悪感は覚えない。

それだけのあり余った力が私にあると、思われる。

すべて推測の範囲だけ。

「それにしても何も無い」

サクサクと草原を横断しながらポツリとつぶやく。

その呟きは風の音にかき消され、私の耳でさえもその言葉を拾わなかった。

うん、本当に何もなかった。

とりあえず歩いてみたはいいのだが、見渡す限り草原であるこの世界を人の足で一日二日でどこかに辿りつけると思った私が愚かだった。

ただ。

この世界は未だ生物も満足に繁栄できない。つまり私の希望していた”どこか”は人里だとか村とかなのだが、見える範囲でも何も見えない。

草原だけである。

まあこの世界に人間がいるかどうかも分からない。

期待も半分にして、どうにか楽に何かある場所へ行きかけた。

草原ばかりあるいても仕方がない。だが、歩くしかないのである。

というか世界が私を招いた理由は、世界を安定させるためであると、認識している。

生物の安定なる環境を作り上げるために呼ばれたのであれば、私はただここに存在するためではなく私に快適なように私の居場所を作ってもいいのではないか、と考えた。

歩くという事に身体的ではなく、精神的に疲れた私はどこかリラックスできる場所を求めていたのだろう。

よし、どっかの森に私好みの家でも建てよう。

その時の自分を振り返ればとんでもない事を考えたにも関わらず、その時の私は何故かやる気満々だった。

私が草原を歩けば、草が私を避けるのである。

というか道を作ってくれるのかな。

世界に歓迎、されていると感じた時もそうだったがこれを当たり前として受け入れている自分がある。

多分、この先何があるかと驚かない。これも判っている事だからだろう。

だからこそ悩む。自分が何なのか。

キーツ

「……………ん？」

ふと足を止めて空を仰げば、黄色い鳥が上空を飛んで行った。

おお、奇麗だとも思いつつ動物を見たのは二度目だと気付いた。

先ほど見たのはウサギのようでウサギじゃない、あまり可愛らしくはない言葉ではどうにも形容しにくい動物がいた。

この世界は変な動物がいるなあ。

黄色い鳥は、きらきらと虹色に輝く粉のようなものを振りまきながら、飛んで行った。

ポ モンのホウオウみたいだ。

そういえば昔は空を飛べたらなあなんてよく思ったものだ。

そこで変な気分陥った。

今ならできるんじゃないか。

「……………翼はやっぱ6つとか、伝説の鳥みたいで格好いいよね」

私はこの世界で自分の願望を自分の手で叶える事が出来る力を得たんだと思う。

この世界が必要とした守護。

それってさ、よく考えたら神様が与えるものじゃないの？

神様だから、”彼ら”が傍に居た。神様だから、草が私を避けた。

そこでようやく合点がいったのである。

この世界での”私”が何者であるかを、やっと意識下で知ることができた。

やはり、私の認識は正しかったようだ。

私の声は”実物”となり、今背中には6つの天使のような翼が生えている。

えー…っ。

第三話 予兆

しばらくの間飛行移動していると、森が視野に広がった。

その森を見つけたのは、マツハな速度で昼ごろから夕方まで飛び続けた末やつのことだった。

もう日は沈みかけており赤く燃えるような赤い光が、草原にひとつだけ人影を作っていた。

背の高いビルや車道もない。障害物のない世界で夕日の光は草も木も真っ赤に染め上げていた。

ああ、もう陽が落ちそうだ。

そういえば今日はどこで寝ればいいのかだろう。

自分の中で勝手に、時がくれば帰れると信じ込んでいて深く考えていなかった。

日を超す、となれば寢床がいる。

とはいっても、この世界にはベッドがない。

「ちよつともう夜だし、一旦降りまーす」とかが出来ないものか。出来ないですか、そうですか。

「そういえば…家作るうって前決心したような」

単なる思いつきを実行するのに、自分の力が通用するか否か。

とりあえず有言実行である。

私は森の中へ入った。

未開の未だ獣道すらない、鬱蒼と茂る木々の中を通りぬけると（まるでト　口みたいだ）

木の茂ることのない、上空からみればぽっかりと穴が空いているように見えるだろう

広場に辿りついた。恐らく此処は森の中心部であろう。

広場には、もう既に陽が落ち昼の姿とは印象を違わせるであろう、ただ静寂に満ちた世界が広がっていた。

闇に煌々と輝く星空が広場の中心部に広がる湖に映り、水面上でも美しく瞬いている。

都会ではもう見られなくなった自然がそこに凝縮されたようである。森閑なる世界の中心には、大木が存在感を示していた。

きっと何百年といや、何千年と此処で育ったのかもしれない。

そんな威厳をもつ大木には、黄色い光が大木を囲むかのように、湖上の空中を泳いでいた。

「ほ、たる…？」

小さな呟きでさえも、この世界には鶴の一声。

私の声に蝟らしき光達は動きを一瞬で止めた。

何が起こったのか、と混乱する私を尻目に光達は歓喜に震えるように飛び回る。

その光は一斉に私の足元から大木への道を光で湖上に道を譲るように光達は分かれた。

光で作られたそれは、神秘的で万人をも魅了するような壮絶たる光。わけも判らず、誘われるように、湖上を歩み大木の聳え立つ孤島へと辿り着いた。

> フェリナーデさ、まく

「！…」

> フェリナーデさま<

「誰…あなたは」

私の返答に慶びを噛みしめるように、少しだけ間を置いて、声はようやく続きを語った。

>ああ、お待ちしておりました。フェリナーデさま。<

>勝手ながら我がフェリナーデ様をお呼び致しました、精霊王ガン
ドールでございます<

声は初めてこの世界に降り立った私に語りかけた、声の主だったよ
うだ。

精霊王、というのは説明されてもよく判りはしなかったが…ようす
るに神に作られ神に仕える者達。

それぞれ力を持てば意志も生まれ
意志疎通が可能になるが現在の精霊たちはほとんどが自我を持たな
い。

私に纏わりついてきた者は、精霊だったようだ。

まだまだ世界が幼く自力で移動したり、自我を持つに至っていない
ようだ。

だが精霊の頂点なる精霊王は自我が存在し、現に私と会話が成り立
っている。

姿を形どる事はまだまだ難しいようだけれど。

精霊王は ガンドールは 、神の守護のない世界を憂いて私を呼び出した。

ガンドール自体、世界が生まれた時点から存在していた分長い年月をこの世界で過ごして力を微力ながらも付けて、自我を持つにいたったが他の精霊はそうはいかなかったらしい。

神不在 まあ、例えるなら……先生不在の学校？

監督者のいない世界、守護のない世界ではそれぞれが好き勝手する。先生の目がないから悪い事しちゃっても大丈夫、みたいな。

ガンドールが心配している事というのは、未来の事を見据えてのこと。

因果律のない世界なんて存在しない。神さえいないこの世界なのに、さらに悪い事に未来の可能性を潰すような真似はしたくなかったのだそうだ。

「それで已むおえなく神を呼び出し

」

> 申し訳…<

「いやいや！もう謝らなくてもいいっていったじゃんか！もう来ちゃったものはしょうがないんだし」

> はい。…まことに申し訳 <

「うるさいうるさい！私が気にしないと云ったら気にしないんだ！

もうこれ以上謝るな！」

ガンドールの言葉を遮って捲し立てるように言って、最後に「いいな？」と睨みつけてやればしゅんとしたように肯定の音が聞こえてきた。

それでよろしい。

ガンドールは私に負い目を感じているのか、私にとっても気を遣いすぎる。

そんなに気にしないでいいのに。

「ところでさ、家を作ってもいいかな」

>家、でございますか？<

「私も人並みの生活を送りたいのでね…ここに作っていいかな？」

>それは全く構いません。フェリナーデさまに逆らえる者など居りませぬ<

「そ、そうか…」

なにこれ、なんかこわい。

まあいいか 若干ひきつった笑みを見せながらも、しゃべる大木ガンを見つめた。

此処を中心に お城っぽいを作ろうかな。

ガンドールは唯一の話し相手だ。彼はまだ力がなく、形を成して移動する事は出来ない。

なら私がこの大木に通って話しかけに行きたい。

湖に囲まれるようにポツリと、それでも威厳を見せる大木。それを
囲う城…。

ああ、でもこの森の景観を崩したくない。

理想としては西洋風のお城を建てる予定だったんだけど、此処はやはり
落ち着ける和風のお屋敷にすることにした。

畳は夏涼しくていいし、日本人だし。いいね縁側って、憧れるわー。
でも、此処は外国なのかな？そしたら人招く時にびっくりされるかな？

あ、というか此処人間がまだいないんだっただか。

（まあ…いつか招くかも知れないし、客間として一部屋洋風のお部屋
にしておこう）

結局、森の景観を壊したくなくて、初め私が来た方向に大きな鳥居
をひとつ作った。

湖の上に浮かぶ鳥居。そして人の背丈ならば、鳥居の中に大木が入
って見える。

森の中心部である此処には結界を張って、鳥居をくぐらないと大木
へ辿りつけないようにした。

湖上の孤島に浮かぶ大木へ、道が現れないようにしたのだ。

そして、湖の後ろに日本的建造物。もちろん木で出来てます。

私の家なのだが、これも鳥居をくぐらないと見えないようにしてお
いた。

…人を招く日が果たして来るかはわからないが、いずれかは招きた
い。

もちろんそれが目的で作った洋風の部屋もある。

森の中だがそれなりに日当たりはいいので、日本風の庭でラジオ体
操なんてしちゃおうか。

不便を感じればまた改築すればいい事だし。
なんてすばらしい力なんだ！いい夢だわ、なんて思ってた自分が今
では羨ましい。

多分、私はこの時私がこの世界で存在する事を軽く受け止めていた。

ガンドールが心配していた事は、世界の未来。

もしかしたら どの世界でも同じなのかも知れない。

生物の頂点に立ち、欲望をふるうは人間。

そうそう時間の立たないうちに私は人間と会おうのだ。

そして、私は彼らと会おう。

それは幸福であり、不幸であった。

小話：忘れられた女神

綺麗な、綺麗な、美しい人。

黒い瞳で、黒い髪を持つと伝えられる女神。

世界を見守り世界と共にある、一番初めの神様。

人々の前には現れたことは一度としてない。
ただ、精霊たちによって言い伝えられてきた。

「うんとうんと昔、真つ黒な人を食べようとする悪いオオカミとたかかって

オオカミをたおして、女神は眠りについた。

次に、せかいのおわりが見えるまで。

ひとが、きゆうさいを求めるまで。」

少年は何度も何度も読み古した、絵本を読み終えた。

本は閉じない、女神が眠る様子を記した絵をじっとみつめる。

黒い髪。閉じられた瞼の下は黒が輝いているだろう。

少年は、少し悲しくなって窓の外を見た。

窓の外には女神が眠るとされる森が鬱蒼と広がっている。

大人は、この絵本を読んで育ってきたはずなのに、女神を信じない。

大人は、皆、女神を忘れてゆく。

少年は思う。

大人とは汚いものだ、と。

当たり前前に感謝せずに目先の利益のために行動する大人を嫌程みてきた。

利益、酒、戦、金。

それは生きていく上で考えなくてはならない大切なことだと、わかっている。

でも、それでも少年は益々心を閉ざしてゆく。

大人は、そればかりだ。

少年は、原始の女神を想った。

原始から、眠り続けて世界を守る女神。

忘れられてしまった、女神。

何故、こんなに自分が女神の神話を気にするのか。

それはきっと自分が彼女と似ているからではないか。

あの森で出会った高位の精霊が言っていたのだ。

この森で眠る女神は

「孤独の女神」である、と。

小話・忘れられた女神（後書き）

シリアス、と見せかけて…！

第四話 精霊（前書き）

しばらく放置してしまいましたすみません。

しばらくぶりで文章がちょっとおかしいです・りハビリ…；

第四話 精霊

「おはようございます、フェリナーデ様。ただいまお眠りになられてから1億と8000年と500年少しが過ぎました」

どんだけ寝てん。私。

「浦島太郎的な？」

「浦島太郎殿は私ガンドルは存じ上げませんが、恐らくおっしゃる通りかと」

知らないのに浦島太郎的なものは感じ取ったんだな。
流石ガンドルだ！、とか思ったけどなんか目の前に麗人が立っていた。

まだ寝ぼけた頭で首をかしげると、整いすぎた顔が穏やかな笑みを浮かべている。

琥珀色の結った長い髪の毛に、同じ色した瞳。

聡明さを醸す切れ目な目を縁取った長い睫毛がばさばさと下睫毛と交差した。

「えっえっえっ！ど、どなたでしょうか…？」

「ああ、失礼しました。人の姿をとりましたガンドルでございます」

私でも分かるような綺麗な礼をとった麗人。

その声は確かに森で聞こえた声、ガンドルだった。

うあ、こんな綺麗な人だったのかとあんぐり口をあけてしまった。

道を歩けば10人が10人振り返る、いやいや、15人振り返るね

！これは！

っていう容姿をしている。

いやいや、今の例えはだいぶんおかしいけど言葉でよく表せていると思う。

以前木で会った彼は精霊では最上位の精霊王で、しばらく私が眠っている間に力をつけて人の姿へと変ずる事が出来るようになったぞうだ。

そんなイケメンだと私が困るんだけど？

まあそんな事はおいておいて。

「なんで、そんなに私寝てたの？」

「フェリナーデ様のお力を安定させるためでございます。世界の不安定な時期も過ぎ、お力を注ぐ負担が大分減ったため覚醒なされた

のでしょう」

「じゃあ、私はずっと今まで寝ながら力を注いでたんだね」

「はい、フェリナー様のおかげで私も人の姿をとる事が出来ました」

無意識なもので、どういう理屈なのかは分からないがずっと力を注ぎ続けていたようだ。

身体の疲れなんぞ一切ないし、気持ちの良い目覚めだがずっと力を絞り取られていたのか…。

色々つつこまなきやいけない事はあるんだけど、私はあえてスルーをしてみた。

だって、神様になったようですから。あはは。

ちなみに精霊たちにとって人の姿をとる、というのは容易なことではなく、大変力のある精霊しかできない事であるそうさ。なるほど。

「うう…人の発展する姿をちょっと見てみたかったんだけど。寝てなのならしょうがないなあ」

「人間、ですか。フェリナー様は元人間であられた方、人間には関心があるご様子。人間達はもう魔法を使いこなしておりますよ」

「魔法を?!」

「はい、国をつくりそれぞれ独立した社会形成を行うまでに発展しました。魔法を駆使し戦を始める事もありますが、現在は表立った大きな争いごともなく平和です。これもフェリナー様のお陰です」

ああー、多分口ぶりから原始時代とかはなさそうだ。
言葉を交わせたなら、というか希望では中世ヨーロッパあたりがい
いな。

街へ観光に行きたい。外の世界を見てみたくてうずうずする。

「そっか、というか私が目が覚める時によく傍にいたね。偶然居合
わせたの？」

「いいえ、フェリナーデ様の覚醒を気配を感じてすぐさまやってま
いりました！」

ばああつと効果音がつきそうな感じで微笑んでいるガンドル。
たぶん、というかきつと本当に喜んでくれているのだろうな。

見た目は綺麗過ぎて冷徹そうだけれど、話せば大分違う。優しい声。
私を見る瞳。

ずっとそんな感じだったから気がつかなかったけど、彼の瞳は優し
さをたたえている。

本当に私が起きた事を嬉しそうにしてくれる。

「……ガンドルはずっと、待っていてくれたの？」

「ええ、はい。ずっと、ずっとお待ちしております」

ガンドルはその一言に何らかの気持ちに乗せたようだった。

頭を垂れ膝をつく。私は神様だそうだけれど、私自身にはそこまで

すごいものはない。

だから頭を下げないでいって言おうとしたのだけれど、顔をあげた彼の顔を見て何も言えなかった。

「貴方にとっては望みもしない事を無理やり強いられ、貴方の人としての未来を奪ってしまった」

「そのかわり私は貴方に尽くすことを誓います」

「人間がフェリナーデ様への恩義を忘れ、信仰が途絶えようとも、私はこの身尽きるまで原始の女神と共にあります」

「よくぞ、よくぞ目を覚ましてくださいました、フェリナーデ様」

フェリナーデ、それは私の名前じゃない。

でも彼が呼ぶと、私はフェリナーデでしかないような気に陥る。きつとずっとこれからも、私はそうでしかないのだろう。

子を見守るような優しさをたたえた瞳。私はたぶん彼と長い付き合いになるだろうな、なんて思った。

寝ている間でも、ずっと待っていてくれたのだから十分長い付き合いなのだけれど。

「うん、おはようガンドル。これからよろしくね？」

「はい、お任せください。我が主君フェリナーデ様」

第四話 精霊（後書き）

生贄君がまだ出てこない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3257/>

私と生贄。

2011年1月8日12時11分発行